

読者のみなさまへ、ボージャーからメッセージをお届けいたします。

今年1月15日『小説・特定秘密保護法 追われる男』という電子本が発行されました。
北沢 栄著のこの作品は現在ボージャーのBinBストアで発売中です。



http://binb-store.com/index.php?main_page=product_info&products_id=16672

昨年末の衆議院解散・総選挙と時期が重なり、特定秘密保護法の施行の重大性は隠れてしまったといえます。書籍版は産学社より法律施行日の12月10日に発売されました。様々なメディアで書評はすでに書かれています。

その中で、2月14日発行の『図書新聞』（3194号）書評欄で山辺裕之さんが本書について次のように書いています。

「本書は長年、共同通信の記者だった筆者が、小説の形でこの法案が施行された後の社会の変質を描き、言論の自由、取材・報道の自由に与える "壊滅的なダメージ" をクローズアップさせた作品だ。」と。

山辺裕之さんが書かれたあら筋から、次のような事実がわかってきます。

発端は、青森県三沢基地近くで起きた交通事故。内閣情報調査室員が重傷を負った事故に疑問を感じた青森支局の女性新聞記者鮎川由美とジャーナリスト今西譲は、背後にステルス（見えない戦闘機）技術のトップメーカーが、この技術に基づく製品を米軍に納入する交渉を行っている事実を突き止め、三沢基地に配備される最新戦闘機のニュースを一面トップにスッパ抜きます。

今西譲は、福島第一原発の放射能除去の作業員の内部告発を記事にしようと悪戦苦闘したり、中国の大都市の大気汚染問題で、習近平・中国国家主席ら最高指導部を批判している上海の中国人実業家と接触したりしている。しかし、こうした「際どい」取材活動は、警視庁公安部の特定秘密保護法専任捜査官の「危険人物チェック」に引っかかり、ステルス技術と米軍の関係をこの中国人実業家にリークしたことにして、特定秘密保護法違反事件の第1号として今西譲を逮捕する「謀略」へと結びついていきます。

そして、次のように言及します。

日米軍事同盟、福島原発放射能問題、中国の大気汚染というアップトゥデートなテーマに、情報規制、言論規制を強化したくて仕方がない公安警察の「野望」を絡めて、ジャーナリストらしい歯切れのよい文章で「秘密保護法施行後」の日本社会を描いている……軍事秘密の暴露を、現政権や公安関係者が「日本の最大の敵」と見做す中国を絡めて、「排外主義による反中国」という現下の日本社会の歪みを暴き出している。

軍事力を強化して、「戦争の出来る国」にしようとしている安倍政権の「暴走」を止められるのか。言論統制を強化している同政権の前にマスメディアは沈黙してしまい、国民も「無言の同意」を与えてしまうのか。この国は重大な岐路に差し掛かっている。

私たちは法律の導く社会の実像をなかなか思い描くことはできません。その法律が何を私たちにもたらすのか？ 小説という形で示された虚像をどう見るか、独自の力で表現と発信に向き合うみなさんに、ぜひ考えていただきたいと思います。